

# チェコ国民楽派と進化論

スメタナ＝ドヴォジャーク論争を手がかりとして

2012年2月3日

16:20～17:50

北大スラブ研究センター 福田 宏

hfukuda@slav.hokudai.ac.jp

2

## 目次

- はじめに — 国民楽派の脱構築？
- 1. オリエンタリズムと進化論
  - 「遅れてきた」国民による自作自演 → 国民楽派
- 2. 演技するドヴォジャーク
  - 『西国立志編』(サムエル・スマイルズ)の典型例？
- 3. スメタナ＝ドヴォジャーク論争とは何か
  - コップの中の嵐？ 進化をめぐる言説として
- おわりに
  - 課題 — 進化論と音楽、そしてより大きなコンテキスト

3

## はじめに

- 目的 — 国民形成の主題に基づく変奏曲
  - 言語、文学、歴史、知の体系、身体(福田2006)、  
**音楽**、建築、絵画、記念碑、自然、etc.
- 方法 — 進化論とオリエンタリズムという補助線
  - 国民楽派の課題: エキゾチシズムと近代性の提示
  - 「遅れてきた国民」にとってのジレンマ  
万国博覧会における日本帝国の参加(吉見2010)  
「自由・平等・友愛」とチェコのヤン・フス
- 対象 — スメタナ(1824-84)と**ドヴォジャーク**(1841-1904)

4



Central Europe, 1910. Source: P. R. Magocsi, *Historical Atlas of Central Europe* (Seattle, 2002), no.36.

5



Ethnolinguistic Distribution, ca. 1900. Source: P.R. Magocsi, *Historical Atlas of Central Europe* (Seattle, 2002), no.30.

6

## 1 (1). オリエンタリズム批判と音楽

- サイドの忘れ物(?)としての音楽
  - メジャーな方法としてはオペラ分析(マッケンジー2001)
  - ドヴォジャークの《アルミダ》(1903) (Nedbal 2007)  
異教徒のアルミダと十字軍の勇士リナルドの悲恋  
東と西の境界が曖昧に... (典型的な構図の不在)  
ex. 勇敢な白人テナー vs. 幻惑的ソプラノ、野蠻なバリトン酋長 etc.
- 「未開社会」の音楽への眼差し (Zon 2010)
  - チェコ出身の独系音楽学者 R. Wallaschek (1860-1917)  
原始舞踊 → 民族舞踊 → 普遍芸術へと進化

7

## 1 (2). オリエンタリズム批判の拡張

- 内なるオリエンタリズム
  - 不安の裏返しとしての反ユダヤ主義(ギルマン1997)  
弱肉強食の世界観 → 「文明」であることへの強迫観念
- 中央ヨーロッパにおけるオリエンタリズム
  - 「辺境」におけるヨーロッパの過剰(篠原2008)  
例としての「誘拐された西欧」(クンデラ1991)
  - 「東欧」の誕生(啓蒙時代)と中欧の創出(ナポレオン期)  
(Bugge 1999, Wolff 1994)
  - 「東」と「西」の二面性を抱え込んだ「中央」

8

## 1 (3). コインの裏側としての進化論

- 進化(evolution, vývoj)思想の新しさ(阪上2003)
  - ダーウィン、ダーウィニズム、社会ダーウィニズム、etc.
- チェコ社会における「ダーウィニズム」の浸透
  - ex. M. ティルシュ(体操)、O. ホスチンスキー(音楽)  
Hermann & Šimůnek (2008), Stibral (2010)
  - 「不協和音」(1874): 生存競争という不協和音→調和へ
  - 「ダーウィンと劇」(1877): 人間社会でも適者生存と性淘汰の原則。しかし芸術と愛を有する人類はその法則を超えることが可能。劇という芸術において、人類は調和へと向かう。

9

## 2 (1). ドヴォジャークの成功物語

- 肉屋の息子、鉄道オタク、鳩好き、素朴な人柄
- 奨学金の獲得とブラームスからの評価
- 《スラヴ舞曲集》の大ヒット、英、そして米国へ
- ケンブリッジ大からの名誉博士号(1891)
  - 人里離れたボヘミアの片田舎に生をうけ、困難と障害を乗り越え高みに至りしそなたは、自らの非凡な才能により、土地の音楽芸術に特有なものすべてを生かすつつ、祖国の名声を輝かしきものとした。...(Kuna, vol.9, pp.258-260)
- 当時のボヘミア・イメージ(Sayer 1998)

## 2 (2). 進歩と退化のはざままで

- 「辺境」民族の文明化？ (Botstein 1993)
  - ハンス・フォン・ビューロー → 「ド」をキャリバンと呼ぶ
- 「分かりやすさ」が嫌われたのか？
  - ... 音楽の内的な退歩とナショナリズムは、チャイコフスキーや「ド」のような民族的後期ロマン派の典型的な作品において、すでに歩みをとりにしている。(アドルノ 1999, pp.328-9) (1961/62年の講演) (一部改訳)
  - 「ド」の新世界交響曲は「通俗名曲の十八番の一つ」であり、「安っぽい効果をねらいすぎている」。「今後チャイコフスキーを一生かかなくとも、あんまり困ることもないだろうと思っている」。(吉田秀和、1960年の著作より)



シカゴ万博(1893)で指揮する  
ドヴォジャーク

Václav Emanuel Nádherný  
(1866-1945)

出典: Burghauser (2006), p.89.

## 2 (3). 演技するドヴォジャーク

- ウィーンでの不遇 (ex. パデーニ言語令事件、1897)
  - チャイコフスキーへの評価との対照 (McColl 1996)
- イギリスにおける2度のインタビュー (1885, 86年)
  - 1度目はドイツ語、2度目は英語 (Beveridge 1996)
- ドヴォジャークの隠された病 (Beckerman 2003)
  - 一人では外を歩けない大作曲家(渡米前から?)
  - 広場恐怖症 (agoraphobia) とパニック障害の兆候
  - 強烈なホームシックとアルコール依存

## 3 (1). 執拗なるドヴォジャーク批判

- 進歩派(スメタナ) vs. 保守派(ドヴォジャーク)
  - 進歩派のホスチンスキーとネイエドリー (Z. Nejedlý)
- ネイエドリーの「負の」遺産？ (1878-1962)
  - プラハ大学音楽学教授、歴史学と美学専攻
  - スメタナの未完の伝記、フス派音楽の研究 etc.
  - 戦間期に共産党シンパ、1939年にソ連に亡命
  - 1945年以降、文科相、科学アカデミー初代総裁等
  - 一貫して、「ド」、ヤナーチェク、マルチヌーに否定的
  - 墓碑銘？: ネイエドリー第1巻、ここに眠る



戯画化されるネイエドリー

<http://www.novinky.cz/domaci/133940-cesko-si-pripomina-60-let-od-unora-1948.html>

イジー・メンツェル  
《つながれたヒバリ》  
1969年

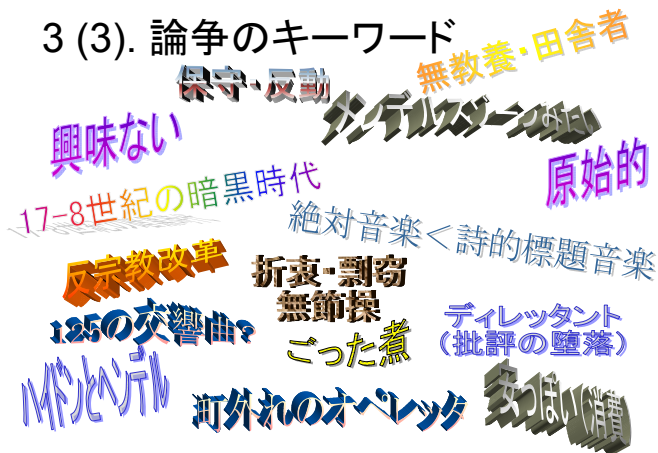
1948年の再教育工場



## 3 (2). 「闘争boj」の経緯 (1911-14)

- 1911年のドヴォジャーク生誕70周年
  - 11年10月18日、<S> J. Bartoš の記事
  - 12年8月14-15日、独 Pymont の D-Fest  
「もっとドヴォジャークを！」
  - 12年12月15日「国民新聞」紙上で<D>Protest
    - <S>→<D> ヘルフェルトの書簡(1929年1月):【概訳】私は極端なレベルではなかったにせよ、確かに反「ド」であった。その点では、間違っていたと言えるのかもしれない。だが、その間違いは、その時代に導かれたものだったとも言える。... (cit. in Šourek 1954-7, vol.4, p.274, n.9).
- (Pečman 1992, 内藤 2002, Dvořák 2004, etc.)

## 3 (3). 論争のキーワード



## 3 (4). ドイツ音楽との接点

- スメタナもドヴォジャークも元々ヴァグネリアン
- 「新ドイツ派」の台頭(1859年:進歩派と保守派)
  - ベルリオーズ、リスト、ヴァーグナー(上山2011)
  - 「保守派」のブラームスと「ド」の親交、そして結託？
- 帰国後のドヴォジャーク(1895-1904) (Beckerman 2003)
  - 絶対音楽との離別(?)、交響詩5・オペラ3の作曲
  - 1904年のインタビュー「私はオペラを書くのだ」
  - NYで改めてヴァーグナーに触れたことが要因？
    - 「自分がヴァーグナーのように書けるのなら...」

## おわりに

- 進化論と音楽論とドヴォジャーク
  - 時代の空気としての進化論と学問としての進化論
  - チェコ社会の進化論(チェコ人とドイツ人で違う?)
    - 科学史 (ex. Hermann & Šimůnek 2008) の可能性と限界
- 国民楽派をより大きなコンテキストで
  - ドイツ音楽史とチェコ音楽史の共通性
  - 進歩と保守、新ドイツ派、ヴァーグナー、etc.

## 参考文献（最近の動向を示すものも含めて）

- Michael Beckerman, *New Worlds of Dvořák: Searching in America for the Composer's Inner Life* (New York/ London: W. W. Norton & Company, 2003). 特に、ドヴォジャークの病を扱った 13 章 The Master is not well を参照。
- Leon Botstein, “Reversing the Critical Tradition: Innovation, Modernity, and Ideology in the Work and Career of Antonín Dvořák,” In: Michael Beckerman (ed.), *Dvořák and His World* (Princeton University Press, 1993), pp.11-55.
- Peter Bugge, “The Use of the Middle: Mitteleuropa vs. Střední evropa,” *European Review of History* 6:1 (1999), pp.15-34.
- Jarmil Burghauser, *Antonín Dvořák* (Praha: KLP, 2007). 英訳あり。
- David R. Beveridge (ed.), *Rethinking Dvořák: Views from Five Countries* (Oxford: Clarendon Press, 1996).
- Benjamin Curtis, *Music makes the Nation: Nationalist Composers and Nation Building in Nineteenth-Century Europe* (Cambria: Amherst, 2008).
- Otakar Dvořák, *Můj otec Antonín Dvořák* (Příbram: Knihovna Jana Drdy, 2004). 息子による回想録。本書の英語版は Idem, ed. by Paul J. Polansky, *Antonín Dvořák, My Father* (Czech Historical Research Center: Spillville, Iowa, 1993). 両者の相違点に注意。
- Tomáš Hermann, Michal Šimůnek, “Between Science and Ideology: The Reception of Darwin and Darwinism in the Czech Lands, 1859-1959,” In: Eve-Marie Engels, Thomas F. Glick (eds.), *The Reception of Charles Darwin in Europe* (London/ New York: Continuum, 2008) (2 vols.), vol.1, pp.199-216.
- Milan Kuna, et al (eds.), *Antonín Dvořák, Korespondence a dokumenty: kritické vydání* [ドヴォジャーク一書簡・史料集] (Editio Bärenreiter Praha, 1987-2004), 10 vols.
- Sandra McColl, *Music Criticism in Vienna 1896-1897: Critically Moving Forms* (Oxford: Clarendon Press, 1996).
- Martin Nedbal, “Dvořák's Armida and the Czech Oriental ‘Self’,” *Current Musicology* 84 (2007), pp.25-51.
- Rudolf Pečman, *Útok na Antonína Dvořáka* [A. ドヴォジャークへの攻撃] (Brno: Filozofická fakulta Masarykovy univerzity, 1992).
- Rüdiger Ritter, “Musik als Element der Legitimierung der Tschechischen Nationalkultur in der Zwischenkriegszeit,” *Bohemia* 47:1 (2006/07), pp.52-68.
- Derek Sayer, *The Coasts of Bohemia: a Czech History* (Princeton University Press, 1998).
- Otakar Šourek, *Život a dílo Antonína Dvořáka* (Praha: Hudební matice Umělecké besedy, 1954-57), 4 vols.
- Karel Stibral, “Durdík a Hostinský: počátky darwinismu v Čechách” (Durdik and Hostinsky: The Origins of Darwinism in Czech Lands), *Teorie a vědy* 32 (2010), pp.319-339.

- Christopher P. Storck, “Die Symbiose von Kunst und Nationalbewegung: Der Mythos vom ‘Nationalkomponisten’ Bedřich Smetana,” *Bohemia* 35:2 (1994), pp.253-267.
- Richard Wallaschek, *Ästhetik der Tonkunst* (1883) (Reprint: Nabu Press, 2010).
- Larry Wolff, *Inventing Eastern Europe: The Map of Civilization on the Mind of the Enlightenment* (Stanford University Press, 1994).
- Bennett Zon, “Representing Non-Western (Asian) Music in Nineteenth-Century in Britain,” Paper at the International Symposium “Orient on Orient: Images of Asia in Eurasian Countries,” July 7-9, 2010, Slavic Research Center, Japan [Not for citation]. その他、Zon 氏には関連業績多数あり。
- Th. W. アドルノ、高辻知義、渡辺健訳『音楽社会学序説』平凡社ライブラリー、1999 年。
- 大角欣矢「チェコ『国民楽派』考」『チェコ・フィルハーモニー管弦楽団 2004 年日本公演』(プログラム冊子)、2004 年。
- 上山典子「ブレンデルによるベルリオーズ＝リスト＝ヴァーグナーの『三人組』概念創出と『新ドイツ派』提唱の戦略」『東京芸術大学音楽学部紀要』36 集、2011 年、pp.73-86.
- サンダー・L. ギルマン、管啓次郎訳『ユダヤ人の身体』青土社、1997 年。  
書評：<http://hfukuda.cool.ne.jp/review/review0202.htm>
- ミラン・クンデラ、里見達郎訳「誘拐された西欧—あるいは中央ヨーロッパの悲劇」『ユリイカ』1991 年、pp.62-79.
- 小山哲「闘争する社会—ルドヴィク・グンプロヴィチの社会学体系」阪上孝編『変異するダーウィニズム—進化論と社会』京都大学学術出版会、2003 年、pp.193-236.
- 篠原琢「地域概念の構築性—中央ヨーロッパ論の構造」家田修編『開かれた地域研究へ—中域圏と地球化』(講座スラブ・ユーラシア学 1)、講談社、2008 年、pp.119-141.
- 内藤久子『チェコ音楽の歴史—民族の音の表徴』音楽之友社、2002 年、他 2 点。
- カレル・V. ブリアン、関根日出男訳『ドヴォルジャークの生涯』新時代社、1983 年。
- P. J. ボウラー、岡寄修訳『進歩の発明—ヴィクトリア時代の歴史意識』平凡社、1995 年。
- クルト・ホノルカ、岡本和子訳『ドヴォルザーク』音楽之友社、1994 年。
- ジョン・M. マッケンジー著、平田雅博訳『大英帝国のオリエンタリズム—歴史・理論・諸芸術』ミネルヴァ書房、2001 年。
- 吉見俊哉『博覧会の政治学』講談社学術文庫、2010 年。
- 福田宏『身体の国民化—多極化するチェコ社会と体操運動』北海道大学出版会、2006 年。
- 同『『国民楽派』再考—想像の共同体としての《わが祖国》』『フィルハーモニー』81 巻 2 号、2009 年 2 月、pp.31-38. [http://dl.dropbox.com/u/202438/200902\\_Smetana.pdf](http://dl.dropbox.com/u/202438/200902_Smetana.pdf)
- 同「遅れてきた野獣—ヤナーチェクの愛・信仰・愛国心」『フィルハーモニー』81 巻 10 号、2009 年 12 月、pp.19-24.
- 同「進化と退化のはざま—ドヴォルザークの『親しみやすさ』と苦悩」『フィルハーモニー』82 巻 5 号、2010 年 6 月、pp.40-45. <http://hfukuda.cool.ne.jp/muzika/muzika13.htm>